

日本語・英語の構造から見た論理の相違

——コミュニカティブイングリッシュに向けての視点——

高 柳 文 江

English Teaching in terms of Structural Differences in Japanese
and English Which Affect Thought Patterns

TAKAYANAGI, Fumie

要 旨

英米人と日本人とでは、物の見方、物の考え方、問題の捉え方、あるいは、感覚そのものに根本的な相違があるのではないかとしばしば感じる。この違いは、長い間生活してきた、いわゆる、環境に起因していることは明白なことである。だが、それだけではなく、人間の使うそれぞれの言語間の相違が大いに影響しているのではないかと考えられる。言語が人間の思考に及ぼす影響は、構造的なもの、音声的なもの、視覚的なものと多岐にわたるが、その中でも、特に、言語構造は、その言語を使う人々の発想、思考を左右していると思われる。本論文では、まず言語が与えた思想、思考への影響についての先行研究を踏まえ、そして、日本語と英語の持つ構造に的を絞って、二言語を対比しながら、それが、日本人、英米人の思考や論理形態にどのように作用しているかを考察した。そして英語の複文の理解についての研究調査、また、その調査結果を踏まえて、日本人が英語を学ぶ際、英米人と日本人の思考方法と相違に関係していると推察される構文をどのようなアプローチから教えていくべきかを検討した。その結果の一つとして、CALL (Computer Assisted Language Learning) の導入を提案している。

1 はじめに

益々のグローバル化の進展で、地球の物理的距離は狭くなり、世界中の人々との接触が日常化してきている。そして今日の高度情報化社会の中で、人々は情報を正確に、かつ、迅速に理解することが要求される。このことは、リングフランカとしての英語教育の重要性が大であることを意味する。そうであるなら、従来の英語教育のアプローチは再検討されるべき

であり、総合的、統一的、かつ、よりコミュニケーション的なアプローチがとられるべきであろう。かかる認識をベースに、本稿は、次の観点からの考察を行う。

言語は人間の考えを伝達する一つ的手段として発達してきた。それゆえ、言語は、それを使う人々の思考方法、論理形態に最も適するように発展を遂げてきた。同様に、人間の思考、論理は、使う言語により大いに影響を受けてきた。両者には、密接な相互関係がある。

2 言語と思考との関連についての先行研究

40年以上も前、E. Sapia や、B. Whorf は、人間の思考は、母国語の持つ範疇により決定されるという仮説を提案した。つまり、日本語と英語とは、異なった言語構造を持つゆえに、日本人は、英語国民とは異質な世界観を持ちうるという仮説である。この仮説は、さまざまな分野で研究が行なわれ、科学的に検証され、支持されてきた。¹⁾

一方、最近になって、この Sapia-Whorf 仮説は、正しく実証されていないとして、反論されるようになってきている。

S. Pinker は、「思考を言語と同一視するこうした考えは、根本的に間違いである。……思考が言語に依存するとしたら、新語は誕生するはずはないし、子供は言語を覚えられないはずだし、ある言語から別の言語への翻訳も不可能なはずである。」²⁾と述べている。彼は、Sapia-Whorf 仮説の根拠となる調査や実験一つ一つを反証し、「人間は、英語や中国語や日本語で考えているのではなく、思考の言語で考えている。思考の言語は、これら全ての言語に多少似ているかも知れないし、同一である可能性も高い。すなわち、これが普遍的な心的言語である。」³⁾と結論している。

同様な立場から D. Slobin は、Sapia-Whorf 仮説を Language relativity (言語相対説) として Language determinism と一線を引いて考察している。Language determinism においては、「言語は、概して、人間の思考、認識に大いに影響しているが、Language relativity の主張する異なった言語の構造が、それを使う人々の世界観を異質な物にしているというわけではない」⁴⁾と論じている。T. Scovel は、D. Slobin の主張する Language determinism は、多岐にわたる実験⁵⁾により実証されていると述べている。⁶⁾

ロシアの心理学者である L. S. Vygotsky は、子供の言語習得の領域より、言語、思考、社会の相互関係を研究するため心理学的実験を行ない、「思考と言語との間には直接的な相互関係があるというよりも、同じ共同体に属する個人個人に共通した思考方法と言語構造があり、それは、個人個人の心的言語 (inner speech) に通ずるものではないか」⁷⁾と結論している。

S. Maynard は「言語構造のみが、話し手の表現域を形成するのではなく、その言語がどのように使われるか、その方法もまた、思考、発想に影響する。話し手は、その言語が理解される方法により、その言語で表現される思考、感情内で表現するようになり、自ずから、思考、感情は、その言語の影響を受ける。」と述べ、「言語と思考の関係は、一面的に捉えられ

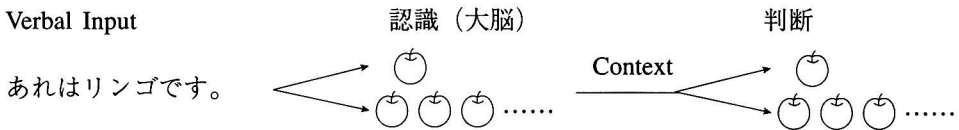
ない複雑なものである。』⁸⁾と結論している。彼は

“It is still possible to draw a general outline of a particular language and its profiles of thought.”⁹⁾

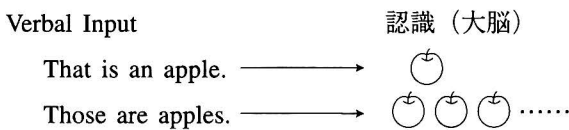
と記し、言語が思考を左右する“Language controls thought.”と決定するのは難しいが、言語が思考に影響を与えている“Language influences thought.”であることは、明白であると結論づけている。更に、Maynardは、言語と思考の関係を論じるにあたり、言語の最も一般的な形、つまり、日常会話に注目することが必要であると論じている。興味深いのは、この分野への人類学者、心理学者の貢献である。

3 日常会話に見る英語的思考方法、日本の思考方法

日本語と英語においても、日常的な会話の中に考え方の相違による表現の違いがしばしば見られる。単数、複数の例を見てみよう。日本語で「あれはリンゴです。」というとき、聞き手は、リンゴが1つある場合と2つ以上ある場合とを想像する。そして、その時の状況により、どちらの場合かを判断する。

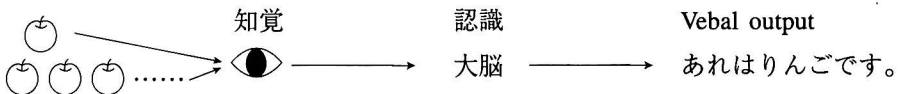


英語では、“That is an apple.”という表現は、初めから1つの場合しか存在せず、リンゴが複数ある場合は、“Those are apples.”となる。

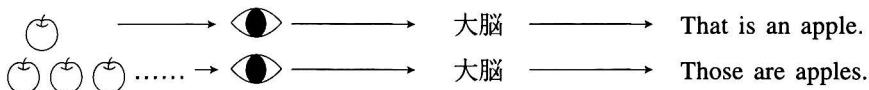


また、事象を知覚してからそれを表現する過程も次のように表わされる。

日本語



英語



日本語においては、いくつかの事象が、つまり、リンゴがいくつであれ、一つの表現「あれはリンゴです」という文章で表わされ、英語においては状況に応じ、りんごの数により、“That is an apple.” “Those are apples.” と表現される。ここでは、英語で表現されている事象と、日本語で表現されている事象とが重なり合っていない。そして、こうした状況は、日常会話の中に数限りなく存在している。

日本人が英語を学習する際、単数と複数を意識するのが難しいのと同様に、英米人が日本語を学習する際、「あれらはリンゴたちです。」などという英語的感覚の誤った表現も出てしまうのも理解できる。日本人にとっては、1つであるか、2つ以上のものであるのかは、たいして重要な事ではないのである。それゆえ、いわゆる複数形が日本語には存在しないのである。

荒木博之が、日本人の自我の意識と英米人の自我の意識の相違が、日本語における複数形の不在に原因しているのではなかろうかと論じている。……例えば、群で行動する Carp や Sheep には、carps, sheeps といった複数形が存在しない。carp も sheep も群として行動し、個々は、群のなかの one of them であり、群の中の一匹を個別化することは不可能である。「複数にするということは、個別化 (individualize) することである。そうであるなら、複数形を持っていない日本語を母国語としている日本人は、対象物を個別化しない、個性を与えて考えない民族であるということになろう。」¹⁰⁾ 日本人特有の自我についての考え、個人を集団の中に埋没させ、平均化させる傾向が、日本語の複数形の不在に通づるのではなかろうかと推論している。

このような日常的な何気ない表現にも感覚的相違が現れる以上、日常、言語を意識せずに読んだり、書いたり、話したりしている我々が、この反復の過程で潜在的に言語に刺激され、無意識のうちに自身の思考パターンを形成していることは否めない。この点について、武本昌三は、「自然が同じではないから言葉も違うのは当然であって、英語と日本語の世界では、自然の対象もその切り取り方も決して一様ではない。……英語で表現されている事象は、日本語で表現されている事象と常に重なり合うとは限らない。」¹¹⁾ と述べている。

4 日本語と英語の構造 vs. 日本人と英米人の思考方法

言語が人間の思考、思想に及ぼす影響は、言語構造的なもの、音声的なもの、視覚的なものなど多岐にわたるが、言語構造は、特にその言語を使う人の発想、思考を左右していると考えられる。ここでは、日本語と英語の持つ言語構造に的を絞りそれが言語を使う人々の思考にどのように関連しているのかを検証する。そして、このことをもとに大学生対象に行なった調査結果を踏まえて、現在の英語教育の在り方に一考察を加えたい。

日本語と英語の根本的な相違（日本語は左枝分かれ言語〈SOV 言語〉で、英語は右枝分かれ言語〈SVO 言語〉である）に起因して、日本語と英語には、たくさんの構造上の相違が現

れている。日本語のこうした特徴を数例挙げてみよう。

- (1) 述部（動詞）が文末に現れる。
- (2) 普通文か疑問文かの決定が文末でなされる。
- (3) 肯定文か否定文かが文末で決定される。
- (4) 複文では主文が文末におかれる。
- (5) 複文においては、接続詞が従属文の文頭におかれる。
- (6) 形容詞が被修飾語の前におかれる。

等々が挙げられる。ほかにもたくさんの事例があるが、詳細に関しては安藤貞男『英語の論理・日本語の論理 対象言語学研究』、高柳文江『日本語の構造と日本人の発想——英語の構文との対比における』¹²⁾を参照されたい。

5 大学生に対するアンケート調査の検証

5.1 複文構造の理解に関する調査

前述の項目のうち、(3) 肯定文か否定文かが文末で決定される。(4) 複文では主文が文末におかれる。(5) 複文においては接続詞が従属文の文頭におかれる。の3点に関して、1977年に調査を行ない、その結果、かなりの学生が複文構造の英文を解釈するのに困難を感じていることが判明した。¹³⁾そこで、今回は、英語の複文構造に焦点を当てて調査した。

1998年6月、132名、4クラスの大学生に複文構造の解釈に関して調査を行なった。対象学生は、大学1年生、2年生で学校英語を6年から7年学習してきた学生である。接続詞で結ばれた複文に関して、10問の設問に答えてもらった。この設問は、接続詞を見逃すことなく、全体の文の論理を正しく、速やかに展開できるかを調べるためのものである。一つのクラスでは、接続詞で導かれる従文をOHPを使い、3－5秒見せた。例えば、(1)の問題ならば“Though he was tired,”の部分である。その後、配ってあった解答用紙の三者択一のうち、論理的につながる文の一つを選んでもらった。ほかの3つのクラスでは、この文を読み上げた。一つのクラスにOHPを使った理由は、そのクラスが人数が多く、教室も広く、Listeningが困難であると判断したためであるし、ほかの3つのクラスは、表現法のクラスとLLのクラスなので音声によるテストを実施した。

配慮した点は、(1) 語意による障害を少なくするため易しい単語を使ったこと、(2) 文章の論理が一般的、常識的に判断できる内容にすること、(3) 最初の文を掲示する前に学生が解答用紙の三者択一の文章を読んで先入観を持ってしまわないように速やかにテストを進行させること（学生たちに即座に論理の展開をしてもらいたかったため）などである。その結果は、次の通りであった。

学生に対するアンケート調査

1. これから読まれる（表示される）文の後ろには論理的に次のどの文がつながるでしょうか。正しいものを○で囲みなさい。

（ ）内の文章は最初に読まれたり表示されたりする文章です。実際の解答用紙には書かれていません。

1. (Though he was tired,)
- | | | |
|-------------------------------|------|------|
| a. he couldn't go on working. | 正解 b | 69 名 |
| b. he went on working. | | |
| c. he felt sick. | | |
2. (Though Mary tried very hard,)
- | | | |
|--|------|------|
| a. she failed the course. | 正解 a | 43 名 |
| b. she won the prize. | | |
| c. she didn't sleep at all last night. | | |
3. (Because the boy was sick,)
- | | | |
|-------------------------------|------|------|
| a. he was absent from school. | 正解 a | 99 名 |
| b. he worked very hard. | | |
| c. he went to work. | | |
4. (Even though you don't like it,)
- | | | |
|----------------------------------|------|------|
| a. you don't have to do it. | 正解 c | 67 名 |
| b. you can ask someone to do it. | | |
| c. you must do it. | | |
5. (Unless you work hard,)
- | | | |
|---------------------------|------|------|
| a. you will succeed. | 正解 b | 68 名 |
| b. you will fail. | | |
| c. you will win the game. | | |
6. (Although he was sick,)
- | | | |
|-------------------------------|------|------|
| a. he was absent from school. | 正解 b | 67 名 |
| b. he went to work. | | |
| c. he went to doctor. | | |
7. (Although the question was difficult,)
- | | | |
|------------------------------|------|------|
| a. he answered it wrong. | 正解 c | 67 名 |
| b. he couldn't answer it. | | |
| c. he answered it instantly. | | |

8. (Because he broke the rule,)

- a. he joined the team. 正解 b 87 名
 b. he had to leave the team.
 c. he was popular.

9. (unless you wake up earlier,)

- a. you will miss the bus. 正解 a 97 名
 b. you will be in time for school.
 c. you will pass the test.

10. (Because he has been trying for many years,)

- a. he is poor. 正解 b 85 名
 b. he is rich.
 c. he is kind.

ただし、この結果には次のような変数 (variable) が存在することを考慮に入れなければならない。(1) 学生の英語能力のレベルにより理解度が異なる。(2) Reading や Listening が困難で誤った論理の展開をしてしまった学生もありうる。(興味あることに Reading の場合も Listening の場合も、結果はほとんど変わらなかった。)(3) 文章の語らいや論理に難度の差がある。というわけで、一概に結論づけ、一般化することには危険があるかもしれない。

しかし、結果は、10問のうち、ほとんどの設問に、1/3 (132名中44名) 以上の学生が不正解であった。問題(3)と(9)は、理解度が比較的高いという結果が出た。(3)は、Because で始まる文であり、(9)は unless で繋がる文である。一般に逆説、though, although, even thoughで始まる節を含む文章は、低い理解度を示した。特に(2)の逆説の文章は、2/3以上の学生が誤った解釈を行っていた。調査の方法自体、前に述べた問題点以外にも難点があり、正確さを高めるためには、改良されるべき点も多々あり、これからの課題としなければならない。

5. 2 If-Clause の理解についての考察

1998年の調査には、あえて if で始まる文章は出題していない。1997年に行なった調査で“if”で導かれる複文構造の文章は、その他の複文に比較して、高い理解度を示していた。これは、次のようなことに起因しているのではないかと推察される。

- (a) If he comes here, we will start working.
 (b) もし彼が来たら、仕事を始めよう。

(a) と (b) の文を対比してみると、if は、もし ～ したらと、日本語においても論理の展開を暗示する“もし”という予告信号が文頭に表示されている。この点で、日本人も英米人

と同様な解釈の過程を経ていると推定される。“unless”で接続される文章についても同様なことが言える。“もし ～ ないなら”と文頭に“もし”という論理の方向を決定するシグナルが表示されている。ただ，“unless”は、否定の要素が含まれているということで，“if”よりも解釈の過程を複雑にしているかも知れない。

5. 3 If-Clause の理解に関する学生への調査

そこで、If-Clause の文章とその他の複文の接続詞を含む文章との理解度にどれほどの相違があるのかを1999年5月に110人、2つのクラスの学生に調査を行なってみた。Although (though), Asで接続される複文とIfでつながる複文の文章、合わせて15題について解答してもらった。対象学生は英語を6年以上勉強してきた大学1年生で、調査の方法は、前回とはほぼ同様だが、今回は全てOHPを使い、Listeningによる方法とはとらなかった。結果は

学生に対するアンケート調査

1. これから画面に表示される文の後に論理的にはどの文がつながるでしょう。正しいものを○で囲みなさい。

()内の文章は最初に画面に表示される文章です。実際の解答用紙には書かれていません。

1. (If you don't like the dress,)

- | | | |
|------------------------------|------|------|
| a. you don't have to buy it. | 正解 a | 52 名 |
| b. you'll wear it tomorrow. | | |
| c. you have to buy it now. | | |

2. (Although he is a university student,)

- | | | |
|---|------|------|
| a. he can't solve such an easy problem. | 正解 a | 53 名 |
| b. he can read English books. | | |
| c. he can get money as a part-timer. | | |

3. (Though my friend introduced him to me,)

- | | | |
|-------------------------------|------|------|
| a. I like him a lot. | 正解 b | 53 名 |
| b. I don't remember his name. | | |
| c. he is friendly to me. | | |

4. (As he said everything,)

- | | | |
|----------------------------------|------|------|
| a. I had to tell you more. | 正解 b | 42 名 |
| b. I don't have anything to say. | | |
| c. he had more to say. | | |

5. (If I can speak English well,)
a. I won't talk to him. 正解 b 53 名
b. I'll get to know him better.
c. I won't have many friends.
6. (As it is usually hot here,)
a. we can't swim. 正解 b 57 名
b. we often go to the beach to swim.
c. they don't enjoy surfing.
7. (If you read this book,)
a. you will understand Japanese culture better. 正解 a 83 名
b. you won't be able to understand the author of the book.
c. you'll never be a specialist.
8. (Though he often tells me a lie,)
a. I don't trust him. 正解 c 32 名
b. Everyone hates him.
c. we trust him.
9. (If you come back late at night,)
a. your mother will get mad. 正解 a 63 名
b. you'll be in time for dinner.
c. you'll be able to finish your homework.
10. (As John worked hard day and night,)
a. he could pay his debt. 正解 a 55 名
b. he could not build his house.
c. he still have to pay his debt.
11. (Though Taro tried his best,)
a. he could win the race. 正解 c 40 名
b. he finished his work.
c. he could not succeed.
12. (If you want to be a pianist,)
a. you played the guitar. 正解 b 88 名
b. you have to practice everyday.
c. your father wants you to be a doctor.
13. (If you have time,)
a. please come and see us. 正解 a 73 名
b. you won't be able to finish.

c. you have to hurry.

14. (As he is honest,)

a. he often tells a lie.

正解 c 79名

b. we don't trust him.

c. he is trusted by his friends.

15. (Though Ken has learned Japanese for 6 years,)

a. he can read books in Japanese.

正解 b 41名

b. he can't speak Japanese.

c. he can talk with me in Japanese.

となった。正解率の多い順に並べると、12. 88名 (if) 7. 83名 (if) 14. 79名 (as) 13. 73名 (if) 9. 63名 (if) 6. 57名 (as) 10. 55名 (As) 2. 53名 (although) 3. 53名 (though) 5. 53名 (if) 1. 52名 (if) 4. 42名 (as) 15. 41名 (though) 11. 40名 (though) 8. 32名 (though) である。前回のアンケート (1998年6月) におけるような変数 (variable) が存在するとはいえ、if-clause は、比較的理解しやすいのではないかと推測される。

6. 予告信号的な語句に注目した Reading

この結果より類推するに、文頭より論理性を決定する“if”、“もし”のような予告信号が読む際にあれば、日本人が英語を解釈する際、解釈の過程がより効果的になり、直読直解への移行がスムーズに進み、返り読みをしないで解釈できるようになるのではないかと推測される。とはいっても、日本語の表現法を変えるわけにはいかない。“Although he wakes up earlier,.....”を「だが、もっと早く起きて……」と表現することは不可能である。だが英語を読む際に、接続詞に焦点を当て、常に意識しながら読むという訓練はできるのではないかと考えられる。

坂井孝彦は、文頭読み¹⁴⁾について、「文と文を繋ぐ接続の語句に注目すれば、文意が予測できるので、文頭から意味を捉えていける。」¹⁵⁾と主張し、繋ぎの語句 (接続詞のみならず、副詞、副詞句も含む。)が、文章全体を捉えていくための大切な標識であり、こうした標識に注目することが、文頭読み、延いては、直読直解、速読への大事な過程となると論じている。¹⁶⁾外山滋比古は、英語の解釈法に関して、「英文解釈から直読直解へ移行するには、関係詞節などにみる節の扱いが鍵であり、節の扱いについて日本語と英語の発想法の違いを説明しながら、原文の順序で理解させるようもっていくのが直読直解へとつながる新しい英文解釈法である。現在の英語教育は、思考や判断作用を伴わない反射的生理活動としての英語教育に陥る危険性がある。」¹⁷⁾とかつて指摘していたが、現在もこの指摘は有益である。

では、文頭にある接続詞（更に進んでは予告信号的な語句、副詞句、副詞も含み）に焦点を当て読んでいくとはいかなる読み方であろうか。（予告信号的な語句、副詞句、副詞とは、例えば、on the other hand, also, besides, in addition 等々をいう）英文を読む際、on the other hand, とあれば、逆説を予測、推論し、also, besides, in addition とあれば、順接を、therefore, as a result とあれば、因果を推論して読む。例えば、

In the past, this way of thinking was accepted, but now we have a totally different one.

この文においては、In the past で過去の出来事を予測し、but で前文で述べられたことが逆説になり、now で現在の状況に言及していることを推測する。つまり、こうした予告信号的な語句に注意を払えば、それぞれの文が何を語り始めるかを予測しながら読み進むことが可能になる。こうした読み方は、まさに英語的思考に通ずる読み方であり、英語を速く、正しく理解するには、大きな助けとなるはずである。

7.1 英語学習におけるこれまでのCALL (Computer Assisted Language Learning) の成果

こうした予告信号的な言葉に注意を払い、英語的思考過程に従い、振り返りをしないで読む訓練は、いかにして可能であろうか。一つの提案として、ここ10年のうちに数々の実験が行なわれ、成果を出しているCALLを取り上げてみよう。周知のごとく、コンピューター技術は、近年、類を見ない発展を遂げ、“technological extensions of the human mind and memory”¹⁸⁾ としてだけでなく、“an environment for communication”¹⁹⁾ ともいわれ評価されている。CALLの長所としては、まず第一に、生徒が勉強の過程で feed-back をヒントや説明などの形で受けることが可能である。第二に、自分の習得スピードに合わせ勉強ができる事が挙げられる。²⁰⁾ 第三に、問題の提示の方法がダイナミックで、感覚に訴える力が強いいため熱中度が高く、生徒は比較的熱心である。²¹⁾ その他にもたくさんの利点が指摘される。生徒は、従来のワークブックタイプよりも長い間コンピューターによる練習に従事する事ができ、習得したことをより長く覚えていることができる。²²⁾ そしてなによりも、生徒が楽しんでCALLのプログラムに従事しており、生徒に高い評価を受けていることである。²³⁾

Word processing においては、我々は思考の過程をコンピューターの画面上に見ることが出来る。言語は、“part of the thinking process”²⁴⁾ であり、思考は、“talking to oneself”²⁵⁾ である。つまり、コンピューター上を書くことは、自身の思考の過程と話す過程を実際に見ることである。コンピューター上では思考の経過をそのまま直したり、足したりすることが可能である。訂正が簡単にできることにより、時間的にも労力の上でも評価される。文の並び替え、語順訂正など、従来、書くという時間のかかる労働を必要とした過程を一瞬の操作で行なうことができる。²⁶⁾ Cohesion や Coherence²⁷⁾ の練習により、文章、及び、パラグラフの理解の仕方をスクリーン上で効果的に学ぶことができる。²⁸⁾

7.2 コンピューターによる英文読解練習

こうしたこれまでのCALLの実験成果を踏まえると、英文のReadingの能力向上のためコンピューターをその手段として用いることは有効であると考えられる。CALLを使って、これまで述べてきたような英語と日本語の構造の相違による障害を最小限にして英語を理解することを学ぶことができるのではないだろうか。そして、訓練を繰り返し行なうことにより英語的思考方法で英語を理解したり、表現したりすることを習得する事が可能ではないかと思われる。英文を読む際には、返り読みを最小限にし、直読直解を自然に身に付けることが可能になるのではないだろうか。

一例として英語の複文を読む練習を考えてみた。

Although he tried hard, he didn't pass the exam.

文章が画面に表示されると予告信号的な語句（この文章ではAlthough）がフラッシュされる。次の段階では、英語能力に従い読む速度を選択し、その読む速度に従い、予告信号的な語句が消去される。つまり、読み始めるとすぐに“Although”は消え、画面は、“…… he tried hard, he didn't pass the exam.”となる。学習者は、“…… hard,”と読み進んだときには、返り読みをして接続詞“Although”を確認することは不可能である。この練習の繰り返しにより、文頭の接続詞に注意を払って読むことを学習する。予告信号的な語句とは、接続詞に限らず副詞、副詞句も含み、こうした予告信号的な語句を画面より消去することにより、文章をこれからの展開を予測しながら読むことを習得する。こうした読み方が身に付けば、返り読みがなくなり、文頭読みへの移行がスムーズに行なわれるのではないかと考えられる。この訓練と平行して予告信号的な語句の後につながる文章を選択する練習問題も論理の展開を予測しながら読む訓練には有効であろう。

〈例題〉次の文に続く文章をa. b. c.の内より選択せよ。

Although he is a university student,

- a. he can't solve such an easy question.
- b. he can read English books.
- c. he studies hard every day and night.

次のステップとしては、コンピューターの画面に表示された“Although he tried hard, he didn't pass the exam.”のうち、“Although he tried hard,”のフレーズが読む速度に合わせて消去されていく。馬場哲夫は、フレーズリーディングとしてフレーズごとに文字の消えていくコンピュータープログラムを用いて通常表現の英文を読むことを提唱している。²⁹⁾そして「……フレーズリーディングは、返り読みをしないで、英語の語順のまま意味を理解していくための訓練である。……返り読みの防止という点では、提示したフレーズをすぐに消すことのできるコンピュータープログラムのほうが印刷メディアよりも徹底できる利点がある。」³⁰⁾と述べている。

8. まとめ

人間は、それぞれの日常使用する言語によって思考方法、論理の展開の方法に影響を受ける。そして、人々は、それぞれの思考、思想に基づき社会習慣、文化パターンを作り上げてきた。「人間の思考は、その言語により決定され、人間各々は、その母国語により異質な世界観を持ちうる」という言語相対論、つまり、Sapir-Whorf 仮説が長い間支持されてきた。一方、この仮説は、これまで、経験学的精査を受け、科学的に立証されていないという意見も多数を占めた。しかし、英語教育の現場に立つ我々教師は、常に、日本人的思考方法で英語を教育する矛盾を感じている。言語相対論の主張する「日本語と英語は異なった言語構造を持つゆえに、日本人は、英語国民とは異なった世界観を持つ。」という仮説は、一概には首肯できない面もあるが、言語と思考の間には密接な関係があるということは確かである。日本人のものの考え方、感じ方が日本語の表現法の基盤となり、そして、その表現する言語、日本語により、日本人の思考方法、感じ方はある程度制限されてしまう。言語と思考とは密接に連動しているのである。人間の思考は言語に作用し、言語はそれを使う人間に作用する。言語を語る際、言語の持つ文字、構造、音声、全てがそれを使う人々の人間性とおおに関連しているということを無視しては、真の意味で言語を理解し、学ぶことは難しい。

本稿では、言語構造に焦点を当て、なかんづく複文構造に的を絞り論じてきた。大学生に対する調査の結果では、if-clause が複文の中では、相対的に理解しやすいという結果が得られた。その理由を推察するに、“if”は、日本語においても“もし～なら”と予告信号的な役割を果たしているからではないかと推測される。それならば、英語を読む際、予告信号的な語句に注意を払い読んでいくなら、日本人も英語をより英語的な感覚で解釈できるのではないかと仮定してみた。

では、日本人、英米人の思考方法と密接に関連していると考えられる英文構造は、どのような方法で教えられるのが効果的であろうかという課題が呈される。従来のような文法重視の翻訳的な英語から、よりいっそうコミュニケーション的な英語を求められる現在、言語教育も、英語的思考方法も考慮に入れた総合的・統合的な英語教育が必要とされている。そこで、ここ10年来、研究、実験されてきているCALLによるプログラムを提案した。具体的なプログラムは、今後の研究課題としたい。

注

(本稿は、1998年9月に岡山で開催された第37回JACET全国大会で発表したものに加筆したものである。)

- 1) そうした検証のうち、「言語は、それぞれ独自の色名でスペクトルを切り分けている。ホピインディアンの時間の概念は際立って独特である。イヌイットの言葉には雪を意味する単語が何十もある。」などが挙げられる。(Whorf, B. (1956) *Language, thought and reality* (J. B. Carrol Ed.) Cambridge, MA: MIT Press)

- 2) Pinker, S. (1994) *The Language Instinct: How the mind creates Language*. New York: William Morrow & Co. Inc. (椋田直子訳『言語を生み出す本能 (上)』NHK Books 1994年 p.77)
- 3) 同上 p.110
- 4) Slobin, D. (1979) *Psycholinguistics*. Palo Alto, CA: Scott. Foresman
- 5) Aitchson, J. (1989) *The articulate mammal: an introduction to psycholinguistics*. London: Unwin Hyman
- Clark, H., & Clark, E. (1977) *Psychology of language: An introduction to psycholinguistics*. New York: Harcourt, Brace, Jovanovich
- 6) Scovel, T. (1988) *A time to speak: A psycholinguistic inquiry into the critical period for human speech*. New York: Harper and Row/ Newbury House
- 7) Vygotsky, L. S., (1962) *Thought and Language*, Cambridge: MIT Press
- 8) Maynard, S. K., (1989) *Japanese Conversation: Self-contextualization through structure and interactional management*. Norwood, NJ, Ablex
- 9) 同上 p.167
- 10) 荒木博之 『日本人の英語感覚』PHP研究所 1986年 pp.70-75, pp.83-95
- 11) 武本昌三 『英語教育の中の比較文化論』鷹書房弓プレス 1993年 p.ii
- 12) 安藤貞男 『英語の論理・日本語の論理 対象言語学研究』大修館書店 1998年 pp.81-103
高柳文江「日本語の構造と日本人の発想-英語の構文との対比における」工学院大学共通課程論叢 35-1号 工学院大学, 1997年, 論説資料保存会
- 13) 同上
- 14) 文章を返り読みしないで頭から読んでいく方法。速読の一つの訓練となる。
- 15) 坂井孝彦『文頭リーディングによる英語速読法』産能大学出版部 1993年 pp.2-26
- 16) 同上 pp.16-22
- 17) 外山滋比古 『外国語の読みと創造』研究社出版 pp.10-40, p.95, p.189
- 18) Leech, G. & Candlin C. N. (eds.). (1986) *Computers in English Language Teaching and Research*. London: Longman
Linowes, D. F. (1991) *Vital Speeches of the Day*. In P. M. Rogers. (ed.), *Aspects of Western Civilization*. NJ: Prentice Hall.
- 19) Pennington, M. C. (1993) *Exploring the potential of word processing for non-native writers*. *Computers and the Humanities*. p.27, pp.149-163
- 20) Hope, G. R., Taylor, H. F., & Pusack, J. P. (1984) *Using Computers in Teaching Foreign Languages*. NJ: Prentice Hall, Inc.
Ahmad, K., Corbett, C., Rogers, M., & Sussex, R. (1985) *Computers, Language Learning and Language Teaching*, Cambridge: Cambridge University Press
Schwartz, H. F. (1990) *Ethical consideration of educational computer use*. In D. H. Holdstein, & C. Selfe. (eds.), *Computers and Writing: Theory, Research, Practice*. NJ: The Modern Language Association of America.
- 21) Wyatt, D. (1984) *Computer and ESL*, NJ: Prentice Hall Inc.
- 22) Windeatt, S. (1986) *Observing CALL in action*. In G. Leech & C. Candlin (eds.) *English Language Teaching and Research*. London: Longman
- 23) Ahmad, K., Corbett, C., Rogers, M., & Sussex, R. (1985) *Computers, Language Learning and Language Teaching*, Cambridge: Cambridge University Press
- 24) Bolinger, D. (1981) *Aspect of language*. New York: Harcourt, Brace, Jovanovich
- 25) *ibid.*
- 26) Kemble, Ian R. and Brierley, William (1991) *Word Processing*. In *Computer as a tool in language teaching*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 11-17
- 27) 文と文の繋がりは「一貫性」(coherence)と「結束性」(cohesion)によって特徴づけられる。coherenceは文と文の意味上の繋がりに関するものであり, cohesionの特徴は言語形式に表わされるとされている。

結束性 (cohesion) を実現する言語的要素を結束の方策 (cohesive devices) と言って「指示, 代用, 省略, 接続詞, 語意的繋がり」などがある。根岸雅史「リーディングの研究とは何か」金谷憲編著『英語リーディング論』河源社 1995 年 p.41

28) Wyatt, D. (1984) Computer and ESL. NJ: Prentice Hall Inc.

29) 馬場哲生 「リーディングについてどのように知るか」金谷憲編著『英語リーディング論』河源社 1995 年 pp.202-210

30) 同上 p.205

参考文献

秋沢公三 『日本語の発想法と英語の発想法の構造』ごま書房 1992 年

荒木博之 『日本人の英語感覚』PHP 研究所 1986 年

同上 『日本語が見えると英語も見える』中公新書 1994 年

安藤貞男 『英語の論理・日本語の論理 対象言語学研究』大修館書店 1998 年

大津栄一郎 『英語の感覚 (上)』岩波新書 1995 年

金谷 憲 『英語リーディング論』河源社 1995 年

寛 恭彦 『日本語と日本人の発想』日本教文社 1984 年

木村哲也 『英語らしさに迫る・日本語の発想・英語の視点』研究社出版 1993 年

坂井孝彦 『文頭リーディングによる英語速読法』産能大学出版部 1993 年

鈴木孝夫 『言葉と文化』岩波新書 1994 年

武本昌三 『英語教育の中の比較文化論』鷹書房弓プレス 1994 年

高柳文江 「日本語の構造と日本人の発想—英語の構文との対比における」工学院大学共通課程論叢 35-1号
工学院大学, 1997 年, 論説資料保存会

外山滋比古 『英語の発想・日本語の発想』NHK Books 1993 年

同上 『外国語の読みと創造』研究社出版 1980 年

中島文雄 『日本語の構造—英語との対比』岩波新書 1987 年

Ahmad, K., Corbett, C., Rogers, M., & Sussex, R. (1985) Computers, Language Learning and Language Teaching, Cambridge: Cambridge University Press

Aitchison, J. (1989) The articulate mammal: An introduction to psycholinguistics. London, Unwin Hyman

Bolinger, D. (1981) Aspect of language. New York: Harcourt, Brace, Jovanovich

Chomsky, N. (1967) Aspects of the theory of syntax. Cambridge, MA: MIT Press

——— (1988) Language and Problems of Knowledge. The Managua Lectures. The MIT Press (田窪行則・郡司孝男訳『言語と知識—マナグア講義録 (言語学編)』産業図書 1995 年)

Clark, H. & Clark, E. (1977) Psychology of language: An introduction to psycholinguistics. New York: Harcourt, Brace, Jovanovich

Davies, G. (1986) Authoring CALL courseware: A Practical approach. In G. Leech, & Candlin. (eds.) English Language Teaching and Research, London: longman

Gudykunst, William B., Editor (1993) Communication in Japan and the United States. Albany: State Univ. of New York Press

Hope, G. R., Taylor, H. F., & Pusack, J. P. (1984) Using Computers in Teaching Foreign Languages. NJ: Prentice Hall, Inc.

Kemble, Ian R. and Brierley, William (1991) Word Processing. In Computer as a tool in language teaching. Cambridge University Press. pp.11-17

Leech G., & Candlin C. N. (eds.). (1986) Computers in English Language Teaching and Research. Longman

Linowes, D. F. (1991) Vital Speeches of the Day. In P. M. Rogers. (ed.), Aspects of Western Civilization, NJ: Prentice Hall

- Maynard, S. K. (1989) Japanese conversation: Self-contextualization through structure and interactional management. Norwood, NJ., Abex
- (1997) Japanese communication: Language and thought in context. Honolulu: University of Hawaii Press
- Pennington, M. C. (1993) Exploring the potential of word processing for non-native writers. *Computers and the Humanities*. p.27, pp.149-163
- Pinker, S. (1994) *The Language Instinct: How the mind creates Language*. (椋田直子訳『言語を生み出す本能(上)』NHK Books 1994年)
- Sapia, E. (1929) The status of linguistics as a science. *Language*, 5, pp.207-214
- Schwartz, H. F. (1990) Ethical consideration of educational computer use. In D. H. Holdstein, & C. Selfe. (eds.), *Computers and Writing: Theory, Research Practice*. NJ: The Modern Language Association of America.
- Scovel, T. (1988) *A time to speak: A psycholinguistic inquiry into the critical period for human speech*. New York, Harper and Row/Newbury House
- Slobin, D. (1979) *Psycholinguistics*. Palo Alto, CA., Scott, Foreman
- Stewart, E. C. (1972) *American Cultural Patterns: A Cross-Cultural Perspectives*. Chicago, Ill.: Intercultural Press, Inc. (久米昭元訳『アメリカ人の思考法』創元社 1982年)
- Vygotsky, L. S., (1962) *Thought and Language*, Cambridge: MIT Press
- Whorf, B. (1956) *Language, thought and reality*. (J. B. Carroll, ed.). Cambridge, MA: MIT Press
- Windeatt, S. (1986) *Observing CALL in action*. In G. Leech & Candlin (eds.) *English Language Teaching and Research*. London: Longman
- Wyatt, C. (1984) *Computer and ESL*. NJ: Prentice Hall Inc.

(本学非常勤講師)